

語りの心

武 田 正

〔要旨〕

昔話は、柳田国男によって固有信仰を探る視点から捉えられ、分類されてきたが、その柳田においても昔話の歴史的な変容に関心が置かれていたところもあった。昔話は聞き手との関係の中で、変容し領域を拡大していったとすれば、語り手が聞き手の心にどのように語りかけたかという視点から、昔話の世界を探る視点が肝要であろう。

本稿では、こうした視点から、昔話の世界に異界との交渉をすえ、異類婚姻譚や妖怪話の意義を聞き手の受容とその歴史的背景に関して述べてみたものである。

はじめに

これまで、「昔話の成立」から「語りの変容」と「語りの場の展開」について述べてきた^①が、本稿では、昔話が聞き手の心に何を語りかけるものなのか、すなわち「語りの心」について論述していくことにしたい。

また、その中であわせて昔話の語りの定形化にもふれ、柳田国男、関敬吾の昔話の分類にも言及しておきたいと思う。

1 死と再生の昔話の世界

親の言うことを聞かず、泣き出したりするとよく「言うことを聞かないと、山のモウの化け物にくれてやるぞ」といわれたことを思い出す。一番おつかないのは「喰ちゃ寝の化け物だ」とは、岩手県での子どもの躰だというのは、佐竹昭広氏の『民話の思想』^②で紹介されたことである。それを昔話の語りにしたのを、山形県東根市で聞いたことがある。

東根市の横尾高治翁^③は、ちよつと一癖ある語り口をもって「脂とり」を語ってくれたものである。というのは、東根市は江戸時代から「タバコの葉」の産地である。十二月の末も末、若者はタバコの「葉のし」の仕事があつて大変であつたという。何が大変かといえば、正月を目前にして、町に遊びに出たいのに、全く退屈な葉のしの仕事は何日もやらされるからだつたという。当時は、タバコの葉は国の許可で栽培し、専売局の職員が何回か来て、生育の状況を検査にくるし、葉の数まで記録していく上で、やがて刈り取ると縄の間に吊るし、からからに干す。そして納入の期日に合わせて、葉のしをした上で、五十枚ずつ束ねて納入するが、そのときにも検査

は厳しく、葉が破損していないか、一部をくすねて吸ったりしていないかまで調べられたものらしい。からからに乾いたタバコの葉を、囲炉裏の火に当てて、一寸柔らかくして手のひらで広げて、重ねて行く仕事であった。子どもにさせると、葉が破れたり、ちぎれたりすることがあり、手伝わることができない。だがこの仕事は退屈で何日も続き、指先が茶色になった上に、手にヤニがつくので、大晦日も近いことであつたから、こつそり抜け出して戻ってこないことも多かつた。そこで大規模にタバコを作っている家では、近所の昔話（笑話）の語り手を頼んで、語りに来てもらうこともあつたという。

横尾翁はまず「鎌倉えび」を語ってくれた。

死んだ人がエンマ様の前で裁判を受け、極楽か地獄かわからないところへ落ちていった。そして家の破風（煙出し）にひっかかってしまった。下を見ると、囲炉裏を囲んで赤鬼・青鬼が博打をやっている。そこで大声で「カマイタチが来た」と叫んだところ、鬼どもはさつと姿を消した。それで残された博打の金を集めて、エンマ様に差し出したら、「娑婆に戻れ」といわれて現世に生き返って戻ってきた。それを聞いた隣のヘヤミ爺が、死んでエンマ様の前に行くと、同じように落ちて、破風に引っかかって、下を見ると鬼どもが、やはり博打をしているので、「カマイタチ」を誤って、「鎌倉えびがきた」と叫んだので、鬼どもからひっかかって、食われてしまったという話である。その上で、よくそろつた「脂とり」を語ってくれたものである。「よくそろつた」といったが、タバコの葉のしを手伝わされている若者が聞き手だから、年齢的にも屁理屈で大人をへこましたり、正

義感を強調する年頃でもあるから、筋をきっちり通さないと納得しないということ、筋がきっちりしているものでないと、聞こうとしないということもあつたものだという。

道楽で欲たかりな若者が山の神に願をかけて、「どうか、毎日仕事をしないで大事にしてくれるところを教えてください」と頼む。その満願の日に、大坂の何とかという家に行ってみると言われる。行ってみると大きな黒い門があり、門番から「どうぞ」と家の中の座敷に案内される。さつそく廊下に足音がして、膳が運ばれる。しかも二の膳、三の膳つきである。それが毎日のことだから、すっかり満足する。

だがしばらくすると、いささか退屈してしまう。そこで散歩でもしようとして戸を開けると、そこに草履がそろえてあつて、こんな接待をしてくれる家だから、大金持ちであろうと思つて、庭に出てみると、なるほど「いろはは……」四十八の倉が建っている。倉の中には金銀珊瑚の財宝がぎっしり詰まっているのだらうと、見て歩くと、どの倉もびちんと錠がしてあつて、中を覗くことができなかった。

ただ一つだけ倉の扉が少し開いているので、覗いてみると、倉の中には何もなく、人が天井からさかさ吊されて、下から火ががんと焚かれ、ぼたりぼたりと脂がしたたつて、金のたらいに落ちていく。まさにへ脂とりをしていたのであつた。そこに二人の番人がおつて、「あの男もそろそろ脂がたまつたらうから、この次はあの男の番だ」と話している。びっくりした若者は、その晩逃げ出す。家のまわりに掘られた堀を泳いで渡り、上がってみると、そこはカラタチ藪であつたが、とにかく

く逃げなければと、カラタチの棘で腹がぎざぎざに切れる。ようやくカラタチ藪を越えると、次にはバラの藪。そこを越えるといままで食いためた腹が切れて、元の腹の減った男に戻ってしまっている。目の前に大川が現れたので、川を渡ると棘で腹から出てきた臓腑はきれいに洗われてしまっている。

川を渡ると路が一本あって、山の方へ逃げると、炭焼き小屋があり、爺さんが炭を焼いている。それまでのことを話して、かくまってくれと頼むと、爺さんは「そういつて来た者が今まで何人かあったが、追っ手に捕まって引っ張ってゆかれた」という。必死で頼むと、「仕方ない、助かるかどうかは解らぬが、炭俵の中に入れておくことにでもするか」という。

しばらくするとやはり追っ手がやってくる。槍で炭俵を次々に刺すが、一つだけ刺し残した俵に入っていたので、若者は助かる。それで「働きもしないで、うまいものを食べたい」などと思つてはならぬという話であるという。

まさに「食っちゃ寝の化け物」の恐ろしさを語ったもので、若者の目が覚めたというのだが、人間界から異界に入つて、思うさま「食つて寝て」を味わつて、その恐ろしさからようやく命から人間界に戻る構図になっている。道楽で欲たかりの人間が異界から戻ってきたときに、まともな人間になるということで、道楽で欲たかりの人間が「死」に、新しい人間として「再生」した話である。昔話とはすべて通過儀礼の「死と再生」をテーマにして出来上がつていると指摘したのは、関敬吾の昔話観(後述)である。多分に、異界に充滿しているカオス(混沌)のなかにあるエネルギー、ヴァイタリティをもらつて人間界に戻つて来るという形をもっているの

だという。

河合隼雄氏は『昔話と日本人の心』⁽⁴⁾で、人間界から異界、異界から人間界へ移行する、まさにその「境界」で事件が起きるのが、昔話のドラマであり、それを楽しむのが、昔話のもっとも大きな特徴である指摘している。そうした事件を端的に見せてくれるのが、「異常誕生」と見ることができらるだろう。「桃太郎」はまさにそれである。

江戸時代の「桃太郎」⁽⁵⁾の赤本を見ると、桃は特別に大きくはないが、あるいは北斎にでも書かせれば、デフォルメされた大きな桃を描いたかもしれない。明治以降になって大きな桃が描かれるようになったようである。そもそも桃から生まれたり、「瓜子織姫」⁽⁶⁾では瓜から女の子が生まれることになっている。反対に「一寸法師」⁽⁷⁾や「五分次郎」のように、小指にも足りない小さな子が生まれる話もあつて、それ自体興味を呼び起こすのは必定である。しかも桃太郎にせよ、一寸法師にせよ、神からの授かりものであつて、人間界に呪宝をもたらすことになっているのである。さらには「踵太郎」のような人間の体の一部が肥大化して、そこから子どもが生まれる等、まさに聞き手の子どもに幻想的世界を見せてくれることから、昔話の世界に酔つてしまうことになるのである。

柳田国男は「桃太郎」を「異常誕生」として捉えているが、関敬吾は「異常誕生」であると同時に、いい若者になって鬼ヶ島へ鬼退治に行き、みごとに鬼どもを降伏させて村に土産を持って戻るのは、一つの「成人儀礼」で、あるいは消えてしまったのが、本来は村に戻り結婚するというモチーフをもっていたかもしれないと想定している。だから柳田の考える単純話型ではなく、「異常誕生」と「成

人儀礼」の二つの話型の複合話型なので、おもしろさが倍加されているのではないかという⁸⁾。アン・ヘリング氏の『江戸児童図書へのいざない』⁹⁾によれば、「桃太郎」の話型は室町時代まで遡ることはできないという。すなわち、江戸時代になって、鎖国政策などが行われ、幕府が絶大な権力を持つことになり、平穏な時代が到来し、庶民文化に一つの転機が訪れるようになると、庶民文化を謳歌する元禄時代が現出するが、それを受けて、子どもたちには、英雄待望の機運が醸成されるような時代になったのではないか。こうして「桃太郎」が現れると同時に桃太郎をプラスの英雄とすれば、マイナスの英雄としての鬼を始めとする妖怪もまた、多様に出現することになって、昔話の世界は豊かに変容することになったのだろう。「桃太郎」自体も昔話から離れて、自由にはばたく例も、山東京山による『桃太郎金太郎雛笹湯の寿』に見られることは、既に述べた¹⁰⁾。だから明治になって、桃が肥大化したり、国民国家への道を歩み始めて、桃太郎が国民を代表する英雄となったり、プロレタリア文学の時代には労働者の代表者として赤旗をふり、軍国主義の声が高くなってからは、戦士の桃太郎も生まれる。さらには第二次世界大戦後には宇宙開発の英雄として、ロケットにまたがった桃太郎まで出現することになったのである。

そうした中で、「伝承」されてきた昔話を、改めて考え直さねばならないのではないかという思いがある。何が伝承を支えてきたかということである。空想を恣にすることで、楽しむことはあり得るにしても、伝承の中にある祖先からのメッセージをこそ、昔話の中から聞き取ることが必要なのではなからうか。柳田は昔話の中に「信仰」を探り、それを遡ることで、日本人の固有信仰に至ること

を願ったといつてよい。だが、昔話の領域がここまで拡大し、信仰から大きく遊離した笑話まで生まれた「昔話の世界」を、新しい視点から見なければならぬのではないか。

その視点を考える上で、次に昔話の語りの定形化と聞き手の関係について見ておくこととしたい。

2 語りの定形化と昔話の分類

古典落語に「ジユゲムジユゲム、ゴコウノスリキリカイジャリ、スイギヨノスイジヨマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニ、スムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポパイポノシュウリンガン、グウリンダイノポンポパイノポンポコナノ、長久命の長助」¹¹⁾という「長い名の子」の話がある。聞くところでは落語の習い始めには、決まってこれから練習が始まるという。昔話としても喜ばれる評判の一つで、語り手の芸の一つとして持っている人が多い。地域によってさまざま長い名が見られ、「もう一つ語れ」と聞き手がせがむとき、今夜の語りはこれでおしまいという意味を込めて、語られるいわゆる「形式譚」の昔話の一つである。

山形県から収集された「長い名の子」だけを拾い上げて、何と三十種あまりのそれが見られる。一見意味不明な詞の羅列にすぎないように見られるが、巧みに語呂合わせが入っていたり、数え歌形式のものなども見られる。いささか早口で語り、聞き手を圧倒して、その夜の語りを終了するということになったようである。座頭の弟子どもが、浄瑠璃を身につける練習台として語った「早物語」の一

つとしてあったのではないかと考えられるが、明確なことはわからない。一つ一つの語句の由来などを尋ねるのは、むしろ意味のないことであろうが、聞き手の子どもにとつては、意味のない言葉を重ねるといふものに興味を抱くこともあり、早口で唱えるところに興味を示すことも大いにあり得ることのようである。

実際に耳にしたものを例の一つとしてあげておきたい。(語り・近きよ)

○ エツケモツケ、ケモツケ、イツツウニカンチヨコライ、トリニモトツタカタケバヤシ、マエノマエノマエバヤシ、テキスイテキスイ、リンボウシヤオンボウシヤ、シヤタカ入道、播磨の彦根の彦助。

○ ニンニクサンバ、クササンバ、イツチヨニチヨ、チヨウタロベエノチヨウジロベエ、エンモクモクノモク地藏、カンノ頭ノカンカラ左衛門。

○ こきこきおん坊草林坊背高入道、播磨の別当、茶碗茶臼にひきんのへこ助。

近きよさんは百話クラスの語り手であった。そして近きよは「長い名の子」をおぼえようとして昔話が好きになったと聞いて、納得したものである。

鎌倉時代の説経語りのテキストとして編まれた無住の『沙石集』に、修行に励んだ尼さまが得度して寺を持つ事になったとき、法名を何としたものかと考えて、「阿釈妙観地白熊日羽嶽」とした。その名の由来は、「阿弥陀・釈迦・妙法・観音・地藏・白山・熊野・

日吉・羽黒・御嶽」から、一字ずつもらって法名とした者であるという話をとりあげているが、これが「長い名の子」になったのであるとうと見られている。

この他にも「この夜の昔話語りの終了を予告する話」が、様々語りの装置として考え出され、昔話の一つのグループを構成するまで数を増やしてそれを「形式譚」として、一括することになった。これは囲炉裏端での語りが普及し、一般化して、聞き手が語り手に、「もう一つ語れ」といいたしたときに語るようになったものである。たとえばその一つに、「三つの話」⁽¹²⁾があるが、実際の語りの場で、どうなのかを小国町の語り手・塚原名衛門氏に尋ねたところ、「おつかなくて、おかしくて、むごさい(かわいそうな)話」という、あたかも長い話なのだという印象を聞き手に与えながら、実は非常に短い話なのだという教示があり、こう語ってくれた。

そがえに昔ばなし聞きたいならば、ええか、「おつかなくて、おかしくて、むごさい話」してやっから、よつく耳の穴ほじくって、ちゃんと聞けよ。

むかしあったけど。山の奥から真赤な鬼が、がーっと村さ下りてきたんだ。鬼だぞ鬼。真赤な鬼だぞ。おつかないべあ。その鬼が、もぞもぞっていつておつたが、急に尻ひったくつて、ぶ、ぶ、ぶ、ぶって尻をひったんだ。屁よ屁。おがしがんべ。

ところがな、鬼の屁、あんまり大きかったもんで、尻ぶっちゃげで、ころっと死んでしまったけど。むごさい話だごで。こんでとうびん。

(山形県小国町・塚原名右衛門)

柳田国男が「はて無し話」⁽¹³⁾で、島原地方のはて無し話を紹介して、こんなおかしい話の裏に何があるか、聞き手の幼児を思う心情が察せられて心憎いことだが、本当にそうなのかどうかは別に、そもそも形式譚そのものの来歴はそう古いものでないのではないかと思わせる一つであるとしている。というのも、昔話の語りが囲炉裏端で定着した段階で、祖母の語りをせがむ幼児が、「もう一つ語れ」とせがむのをやんわりと押しとどめ、「今日の語りはこのへんでおわり」という意図を込めて、「はて無し話」が生まれたという意味で、昔話語りが社会にほぼ定着しているということである。ともかくこの事例で興味あることが、いくつか発見されるので、ここで引用しておきたい。

むかしむかし長崎の港に、多くの鼠が住んで居た。ひどい飢饉の年に難儀をして、もしか薩摩へでも行つたら食物が得られようかと、大勢打ち揃うて舟に乗り、岬を廻り廻つて不知火の海へ漕ぎ出した。さうすると遙か向ふの方から、薩摩の国の鼠たちが、是もあんまり世の中が悪いので、長崎へ行けば少しは食ふ物があるかも知れぬと、一同相談をして舟を漕いで遣つて来た。長崎の鼠の舟と、薩摩の鼠の舟とが、海のまん中で出会うて、互ひに声を掛けて何処へ行くのかと尋ねる。さうして詳しく双方の様子を話し合つて、それでは折角渡つてゆく甲斐も無い。いつそ此海へ入つて死んだ方がよいと言つて、先ず長崎の鼠が一疋、チュウチュウと泣いてドンブリと海に飛び込む。さうすると今度は薩摩の鼠が一疋チュウチュウと泣いてドンブリと舟から身を投げる。其次には長崎の方の鼠が又一つ、チュウチュウと泣きながらドンブリと飛び込む。……

大よそ斯んな風に何十疋でも、小さな聴き手がもう止めてくれといひ出す迄、二箇所の鼠が海に入つて行くといふ昔話がある。この不知火湾の岸に沿うた、肥後の上益城の村々にあつたさうである。普通には之をチュウチュウドンブリと名づけて、如何なる話好きの少年でも、是に辟易せざるは無かつたといふことである。

「はて無し話」の楽しさがよく現れているのに加えて、「チュウチュウドンブリ」という唱えごとというか、言い草にはつい相好が崩れるほどである。一つの呪文と見てもよいのではないかと思われるほどである。その上で、柳田はこうコメントしている。

併しさういふ中にも九州のチュウドンブリには、まだ懐かしい昔人の情味が籠もっている。第一に鼠島の物語は、絶えず南国の民が口にする、最も有名な年代記の一部であった。凶年には海を越えて無数の鼠が、遠くの島から渡つてきて、木の根草の実を食ひ尽すといふ話は、近い頃までの現実の恐怖でさへあつた。児童は其歴史の片端を語つて聴かされて居たのである。

それに「長崎と薩摩、是が又近代の富と所謂異郷情調の、新たな話の泉の露頭であつた。それ等の材料を爰に面白く結び合せて」つくられたものと推定している。まさに新しい時代に生まれた形式譚であることを、語りの中に諸種の工夫がなされたことから指摘しているのだが、時代が時代であつたため、柳田においては、まず日本の昔話がどれほどあり、どこから流れ出したものであるか、その源泉はどこにあるかということに目が向けられて、時代、社会の歴史の中でどのように変容されたかについては、極めて大雑把に、信仰があまり崩れずに話の中に温存されたものとしての「完形昔

話」と、あらかた崩れてしまった「派生昔話」に分類し、派生昔話
が生まれた事に対して、「零落」という語彙をもつて、感情的な名
辞で切ってしまったのであった。

さらにいえば、結びに語る昔話に対して、まずこの語りを聞いて
からでない、他の昔話は語らないという「初めに語る昔話」の所
在も明らかになっている。「話の三番叟」とか「河童火やろう」⁽¹⁴⁾
といわれ、福島・秋田・山形に発見されている。

河童が出てきて、「婆ひかせ(尻をひかせよ)」と聞き違えて、婆
は「火貸せ」と思い、「川の中では火は消えてしまう」と思う。爺
さんが山から帰ったので、その話をする、爺さんは、河童に火を
貸さねばと、松明を付けて川へ行つた。「かわとんひかそ」とい
うが、「ほんかほんか」と、それを繰り返す「はて無し話」になつて
いる。爺が「かわとんひかそ」といえば、河童が「ほんかほんか」
と応ずる。「かわとんひかそ、ほんかほんか」は語りの三番叟だろ
うと指摘されたのは、野村純一氏である⁽¹⁴⁾。

形式譚は結びの句の変形したものではないかと考えられる。
柳田の指摘にもあることだが、昔話語りの長い歴史の中で、聞き手
の耳にうまく入るようにと、次第に定形化したと思われる。昔話の
変容・拡大には、こうした聞き手との関係という視点が必要なので
あって、昔話の世界もここから捉えなおされるものであろう。

なお、語りの定形化＝約束事としての「語りの始めの句」「結び
の句」にもふれておこう。昔話の始めの句は「むかしあつたけど」
「むかしあつたけずまなあ」に始まる。すべて「昔」のこととして
語る中で、社会や時代、時には為政者への痛烈な皮肉や揶揄なども
入り込むことにもなるが、「昔」のこととして語ることで、間接的

になり、目くらしになることは大いにあり得たことだったろう。
また聞き手は語りの一節一節に相槌を打つことになっていた。山
形の「オットー」、福島の「ハート」、新潟の「サンスケ」、それに
柳田が記している古い相槌として、岩手の「口に烏帽子ハアア」が
あつたというし、山形では結びに「無口、無口」というのも、相槌
から来たように思われる。

語りの結びの句も、地域独自のものが見られる。稲田浩二氏は結
びの句に「シモの話」が多いと指摘している⁽¹⁵⁾。地域によって差
異があり、まとめには必ずしもならないが、各地域の中で特色があ
ると思われる結びの句を拾い上げてみたい。

大分県「むかしまつこ猿まつこ、猿のお尻は真つ赤しよ」。高知
県「むかしまつこ猿のつびあぎんがりこれも方丈物語」。徳島県
「鳥のつびやあびいこびこ、猿のつびあぎんがらぎんがら」。京都
府「いちがぶらんとさがとる」。岐阜県「しゃみしゃきり、茶釜の
蓋がながらん」。石川県「それつきり候え、なんば味噌和えて食
べたら辛かった」。新潟県「いきがぼーんとさけた」。秋田県「とつ
ぴんからりん山椒の実、豆こはじててぺんこぺんこ」。岩手県「ど
んとはらいホラの貝こ、ぼうぼうと吹いたとさ」。

大別すれば「市が栄えた」系、「しゃみしゃきり」系、「むかしまつ
こ」系、「とつぴんからりん」系、「どんとはらい」系、そして山
形県の「とうびん」系があるが、「とうびん」は江戸時代の黄表紙
の結びの句「棹尾」からきたらしく考えられる。

聞き手が「もつと語れ」というと語り手もそれに応じようとして、
結びの句を少しづつ長くする。その多様性は目を見張るばかりであ
る。山形県の場合の例を拾い上げてみたい。

- むかしとうびん河童の屁、突つき候。
- きまりきんちやく、猫のふんどし。
- どんびんさんすけホラの貝、ぼーぼーと鳴ったとさ。
- どんびんさんすけ、酒田の猿の尻、まっかつか。
- どんべすかんこ、猿の尻さ、牛蒡焼いてぶつつける。
- どうびんさんすけ前で火はねて、ごんすけ前で火消した。
- とうびんさんすけ橋の下の赤きつね、大根一本背負わんね。
- むかしとうびん、さんすけキンタマ虫くって、ボコボコジンになった。
- むかしとうびん河童の屁とうすけカエツポ火吹いた。
- むかしとうびんさんすけ笹巻きまいたけど、ごんすけ来てくつたけど。
- どうびんさいすけさいざぶろう、さいざの尻さ火がはねて、おいまの屁でぶつと消した。
- とうびつたり、釜の蓋さんすけ、さんすけ頭さ火はねてごんすけ頼んでやつと消した。
- むかしとうびんさんすけびつたり釜の蓋、灰で磨けばええ銀玉、さんすけふんはい。
- どんびんさんすけ猿このキンタマ、笹葉さ包んで、それ土産。
- あどとつびんからりん山椒味噌、けたつとなめれば辛い辛い。
- どんびんからりん、すからりん。
- どうびんさんすけ猿まなぐ、猿のまなぐさ毛が生えて、けんけん毛抜きでぬいたれば、まんまん真つ赤な血ができて、こうこう膏葉貼つたれば、めんめん盲目（めっこ）になり申した。

最後のものは、世界で一番長い結びの句ではなからうかといわれているものである。子どもの間は、遊び疲れて別れるときにわらべうたとして歌うものもある。結びの句はやがて形式譚の「はて無し話」へ移行することは、大いにあり得たという意見も無視するわけにいかないと考えられる。

こうした経過を辿って、語りそのものも始めの句・結びの句を持つことになって、語りの定形化の道を歩むとともに、語りの禁忌なども生まれることになったのだろう。全国的にみられる「語りの禁忌」、または習俗を諺にしたものに、「昼むかし語ると、天井の鼠っこから小便引っかけられる」とも、これは夏昔の禁忌にもなっている。その上「その小便が目にはいると盲目になる」ということになる。

また「節季なんすの春むかし」という諺が新潟県にある。田仕事が終わったならなぞなぞをしよう、正月になったら昔話を語ってやろうというのである。同じ詞は山形県の最上地方では、「秋餅むかしの正月ばなし」といつている。ついでにいえば「むかしむかし、とんとむかし、とんとむかしはあったもんだが、ないごんだが、とんとわかんねげんども、とんと昔のことは何でもあったことにして、聞かねばなんねえ、え」と、聞き手に確認してから、語りが始まるという習俗が、鹿児島県と山形県から発見されている。それを見ても昔話語りの定形化のプロセスで生まれた禁忌とみる事ができよう。

以上のような語りの定形化は、聞き手と昔話の関係性をうかがわせるものであった。ここからさらにいわゆる昔話の分類に眼を転じてみるならば、どうであろうか。

日本の昔話は約八百種に及ぶことが分かっている。関敬吾の『日本昔話大成』によってみると、「動物昔話」「本格昔話」「笑話」と、伝説と昔話の境界が明確でなく、語り手によっては伝説と考えられたり昔話と見て語るといふ「補遺」に分類できるが、これを聞き手の例から見れば「動物昔話」は三、四歳の子に喜ばれ、村共同体はいろんな狐や犬、兎、蛇、狸のような人によって成り立っているということ、動物で形象化して語るものである。そのときの動物は、自分の住む村共同体の中で、よく目にする動物から類推して、子どもでも形象化できる妖怪が登場することになる。

四、五歳になると、「本格昔話」へ移行する。村共同体に生きていく際の基本的な人間関係を見せてくれるものである。「桃太郎」に例を取るまでもなく、主人公が生まれるところから、やがて成長し、事件に遭遇し、それを克服するまでの物語なので、語りは長くなるものが多い。その「本格昔話」にもしばしば動物は登場するが、「動物昔話」の動物とは異なって、動物そのままが登場することもあり、動物が人間に化けて登場することも多い。そしてその延長線上で、鬼・河童・山姥などの妖怪が登場することも見られる。昔話の最も重要なテーマでもある異界を訪問するモチーフを持つものが多い。

六、七歳ころから一二、三歳の聞き手に喜ばれる「笑話」は、聞いているとつい吹き出したくなる笑いに包まれる話群で、村共同体の中で生きる、具体的な生き方を見せてくれるものである。主に失敗譚の形を取っているものが多い。失敗を通して生き方の在り方を知るものといえ、この年齢層の聞き手は一筋縄の話よりは、裏返しなり、頓知で権威をうち負かしてしまうようなことに、興味を示す

上に、反抗期特有の失敗をあざ笑うような話柄を喜ぶのが、また一つの特徴といつてよいだろう。関の示した昔話の分類は、聞き手の年齢や成長段階に応じて、こんなふうに対応するものといつていいようである。

ところで、この分類方法に関していえば、関の『日本昔話大成』の分類はフィンランド学派のアアルネ、トンプソンの形態的分類を、日本の昔話分類にも応用できるということで、「動物昔話」「本格昔話」「笑話」としたが、その師でもあった柳田国男は、日本人の固有信仰を探るところに、焦点を据えて民俗学を考えたところから、分類を考えるにあたって、アアルネの分類をも検討した上で、日本人の信仰がおおよそ残っている昔話を「完形昔話」とし、信仰がずれてしまっていたり、信仰が消滅してしまった昔話を「派生昔話」として分類し、特に昔話自体は神話から流れ出したものだが、信仰というものから見れば、「零落」して昔話となり、さらに零落して「笑話」が生じたと思、話型の分析などを見るときも、笑話はほとんど取り上げようとしなかったといつてよいのではないかと思われる。

だが柳田は早くから、昔話の伝播に芸人がからんで、変容する原因の一つにはその芸人たちのことがあると考えている。いわゆる「昔話の変容」については初期から、強い関心を抱いていたのだが、関の場合は分類に力を入れ、ようやく分類にメドが立ってから、昔話が民俗文化の中でどんな役割を果たしてきたかについては、むしろ次の時代の研究者に後をゆだねるといつたメッセージを残すにとどまった観が、なきにしもあらずであった。

3 異類婚姻譚の意義

「1」でも述べたように、昔話は通過儀礼の中の「死と再生」こそがテーマであると、関敬吾は『日本昔話の社会性に関する研究』⁽¹⁶⁾で細部に涉って論証しようとした。昔話の主人公は異界を訪問して、再び人間界に戻ってくる。「黄金の斧」のように、沼に落とした斧を異界の水神に拾ってもらい、正直だからというので褒美をもらったり、「浦島太郎」のように竜宮の姫¹¹異界にいる神と出会うこともある。その一方で人間に化けた動物が人間界に遣ってきて、そうした動物と結婚する話も多い。ドラマ性においては後者が圧倒的であるともいえる。日本の昔話では動物が人間に化けて人間界に来る異類婚姻譚が多い。

異類婚姻譚には異類婿と異類女房に類別できるが、いずれにせよどんな動物と結婚するかをみると、「蛇、狐、猿、犬、馬、猫、鶴、魚、蛤、蛙」など、村共同体の中で、よく目にする動物たちであるが、その延長上に鬼、河童、天人から木魂、山姥まで出てくる。中でも木下順二の「夕鶴」は佐渡で発掘された「鶴女房」が下地になっていることは周知のことである。

ヨーロッパの昔話では人間が魔神や魔女などによって、動物に変身させられ、その動物との間に芽生えた「愛情」によって、動物から人間に戻り、めでたく結ばれるといったタイプの異類婚姻が多いことを考えると、ヨーロッパのそれは、本来人間と人間が結ばれるのだが、その点では日本を含むアジアの異類婚姻と大きく異なっているといわざるをえない。日本の昔話では、最終的には動物の本性

が暴露されて離別せざるをえなくなるようになり、悲劇的な結末を迎えるということになる。ヨーロッパの昔話に親しんだ人からすれば、ファンタスティックな面が日本の昔話には薄いという印象があるのだろうか、ヨーロッパの昔話に比較すると、日本の昔話はむしろ「伝説」に近い印象を受けるようである。

ともかく、日本の異類婚姻について、桜井徳太郎氏は、「人獣交渉の歴史」⁽¹⁷⁾の中で生まれたのであろうという。そして動物神と人間が婚姻するのが、異類婚姻なのではないかというのである。動物と人間の交情ということから、やがて「動物神」と人間の婚姻話になったと見るのである。ただ異類婚姻と受け取る聞き手の子どもたちは、「動物神」として受け取るかどうかは、話型によって必ずしも同一でないことに注目しておかなければならないだろう。

動物神の神性を何処に見るかを考えると、日本人に限らないだろうが、自然神に見るように人間の生活に豊穡をもたらすことから尊ばれる神と、人間にとつては怖ろしいことをもたらすので、そうした神を忌避するという理由で神格を付与する場があるが、農耕社会での動物観はどちらかというと、自然そのものとする傾向が見られるといえよう。だが昔話に登場する動物は村共同体でよく目にする動物たちであり、そうした動物を神格化するときには、聞き手は人格神に近いものとして理解することが多いかもしれない。そんな意味でむしろ登場する動物の、人間との違いと、その動物に神格を付与したときには、人格神に近い認識をするから、人間との格差と人間に豊穡をもたらす人格神という二面を、話型によって聞き分けて理解するのではなからうか。そうした二面性をもって「動物神」と「人間との差異」を、ここでは「蛇・狐・猿」について、昔話の

中で検証しておきたい。

蛇についてみると動物の中であまりに人間と異質な形の存在で、どちらかというと、嫌悪感を抱く動物といえよう。その上、水神に擬せられたり、水神に仕える動物と見られてきた。竜神信仰も多く見られ、「竜」の造形には蛇と亀がかかわっているという説もある。神像や仏像にはそうした神仏の守護神として、蛇が見られるものも多いが、昔話の語りの中では、蛇神としての受容はどうなのであるか。確かに「蛇を半殺しすると祟られる」などと、祟りものとして蛇を見ることも確かであるが、聞き手の受容には動物としての蛇と、擬人化された人間としての蛇をもつて受容されているのではないかとさえ思われる。

「蛇智入・苧環型」「蛇智入・水乞型」¹⁸の蛇は人間に化けて娘のところに来て娘と結ばれるが、やがて本性を現して離別し、あるいは死なざるを得なくなる。「蛇女房」では男と結ばれ、二人の間に男の子が生まれるが、油断して蛇の本性を現わし離別したが、子を思うあまり目玉を与えるが、いつか無くなり、残ったもう一つの目玉を与えるので盲目となり、その子を三井寺の小僧にして朝と夕方方に鐘を撞くことで、母に朝と夕方の時間を知らせることとし、やがて三井寺の住職になるという話である。蛇でなければならぬことでもないことから、いろいろな動物が女房になる昔話があるが、『古事記』の三輪山神話、箸姫神話にあることで、そこから変容したものと見ることができ、蛇の代わりに狐として登場する例も多い。

狐は「動物昔話」「本格昔話」に最も多く登場する動物である。『遠野物語』¹⁹には「猿の経立(ふつたち)、御犬の経立」の話

があり、獣が老いると化ける力を身につけることになると思われるが、狐は普段でも化けることができる獣と思われる。人間生活のすぐ近くに生息しているということもあって、いろいろな形で昔話には登場するが、「狐は化けても人間を殺すことはないが、狸は化けて人を殺すことがある」ので、気を付けなければならぬとも、民俗習俗にいわれる。確かに昔話の中の狐は人を殺すといったことはなく、むしろ人の恩に報いる話もある。「人と狐」の項目の中には、人間との知恵比べなどもあって、狐を逆に人間がたぶらかす話も見られる。

民俗社会の中では、稲荷信仰が広がっていて、人助けをした狐の話も多く、中でも農耕社会に広がった「稲荷」の説話はよく知られている。朝鮮半島から体に稲の穂を縛り付けて持ち帰ったが、荒れた海におぼれて死ぬが、体に縛り付けた稲の穂がやがて日本の稲作文化を創ったので、神に祀ったという説話である。

その反面、「狐憑き」落ししの習俗があり、井綱と呼ばれる竹筒に入れた小狐をもつて祈禱する習俗があり、それをオサキとも呼んでいる。そうした家柄の娘が嫁に行くときには何匹ものオサキが嫁の前後にぞろぞろとついてゆくが、そうした娘を嫁にした家も狐憑きになるなどといって、差別の対象になっていた歴史がある。しかし、昔話ではもっぱら「化ける力」をもっている動物としての狐であり、「化ける力」そのものが昔話のモチーフとして語られる。井綱・オサキ狐はまさに狐神としての動物神と見て取れるが、昔話の中の狐は単なる「化ける力をもつ動物」としての狐でしかない。

猿の登場する異類婚姻譚は「猿婿入」の一話しかない。水神とのかかわりを持つ話で、三人の娘の下の娘が、山の田に水を掛けても

らった代わりに、猿の嫁になる話であるが、明らかに「蛇婿入・水乞型」の延長上に生まれている。そうした意味から、蛇や狐と並んで民俗社会に親しい動物であり、多分に村共同体でよく目にするところから、昔話を聞く子どもたちにとっては、納得しやすい動物であり、好まれて昔話の世界に登場することになったといえなくない。その上、人間と最も近い動物ということもあつたらう。

同じ動物であつても、「動物昔話」に登場する動物と「本格昔話」の動物はいささか違っていることは、前述したところであるが、「動物昔話」の動物は聞き手の年齢が低いこともあつて、理解度のこともあるから猿はいつも小ずるく、ひとの真似をする動物として描かれる。さまざまな性格の猿が登場しては、聞き手が混乱してしまうからである。それに対して「本格昔話」の猿は「猿地藏」を一つ取り上げても、川べりで猿酒に酔って、寝ている爺を、地藏と思つて爺をかつぎ、川を渡つて地藏堂を建てて、それを真似した隣の爺は失敗して、川に放り出されるのである。

猿が最も多く登場するのは「動物昔話」で、「猿蟹合戦」をはじめ、「猿と蛙の寄合餅」「猿の生き肝」「猿と蛙の寄合田」などである。そうした「猿」はどんな話型のものも小ずるい、人真似をする猿で、そんな猿として定着してしまつたのではないかとも思われる。そうしたことから、猿に限っていえば、「本格昔話」に登場しても、小ずるく、人真似をする動物として描かれる傾向が見えるといつてよい。『今昔物語』の中に二話も出ている「猿神退治」でも、小ずるさが描かれており、しかも平安時代の末に書かれた『今昔物語』であることを考えれば、日本人の「猿」はもうこの時代に定着したと見ることができるとも知れない。だから『遠野物語』の中の「猿

の経立」は、昔話の猿とはかなり大きな違いが見られるが、およそ昔話的なものになつていないといわざるをえない。その差異を知るために、引用しておきたい。

(四五) 猿の経立はよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去ること多し。松脂を毛に塗り砂を其上に附ける故、毛皮は鎧の如く鉄砲の弾も通らず。

およそ昔話に登場する猿と重ねることができないほど、怖ろしいほどに動物(神)として描かされていることは明白である。

ところで、ヨーロッパの異類婚姻の話と日本のそれとがこうも違っているものになつたのはどうしてなのだろうか。日本を含んだアジアの農耕社会では、動物は人間の仕事を手伝つてくれる。牛馬は田を耕し物を運んでくれる動物と見、仏教の影響もあつて、動物も草木も人間同様自然の一部である上に、命あるものはすべて仏の力によつて成仏できるということである。山形県米沢地方に「草木塔」「草木供養塔」²⁰が多く見られるが、その建立には当時の修験が関わり、大乘経でいう「草木国土悉皆成仏」という銘を入れた石塔も見られる。草木にも命があるという仏教も、あるいは昔話の「異類婚姻」に大きな影響を与えていると見ることができそうである。

ヨーロッパは牧畜社会だから、牛馬を含めて動物は財産に他ならない。動物は売買の対象に他ならないのだが、農耕社会では動物は人間と同じ存在なのである。こうしたことから異類婚姻譚に差異が生まれたのではないだろうか。

4 異界と妖怪―山姥の登場

源義経については東北地方の人々は特別な思いを抱き続けてきた。『平家物語』の義経ではなくて、『義経記』の義経についてである。『御伽草子』に「御曹子島渡」がある。御曹子とはもちろん義経のことで、兄頼朝の追及を逃れて、藤原秀衡を頼って平泉への路を辿るのだが、時すでに遅く秀衡はなく、その子泰衡は頼朝の厳命に抗しがたく、衣川での激戦で義経は自刃したという。その義経は、実はここで自刃したのではなく、何人かの家来と共に北海道に渡り、シベリアへ行くという伝説が後々まことしやかに流れたのである。そうしたことの背景となるものとして、「御曹子島渡」があったことは明らかであろう。千島の都・喜見城へ行き、そこで「大日の法」なる文書を盗み見て帰る作品である。大日の法とは祈祷の書で来世の仏道の法であるという。秀衡から教えられて、土佐の港で舟を求め、神に祈りを込め船出する。こんろが島、大手島、ねこ島、いぬ島、まつ島、うし人島、おかの島、とら島、かぶと島、たけ島、もろが島、ゆみ島、鬼界ヶ島、蛭が島を経て、きょうがる島に着く。「きょうがる」とは風変わりで変てこなという意味で、腰より上は馬、下は人の形で、十丈ばかりもある人の島である。まさに馬人島なのである。太鼓を腰に付けている。何の太鼓かといえば、「われわれがせいのみあまり高くして、手折れてあれば、起きあがることなし。叫べど声の出ざる時、是をうちならし候」という。次には「はだかの島」に着く。ここでは越後上布七八十を贈って喜ばれる。七十余日で着いた島は女ばかりの島であった。また三十

余日で着いたのは「小ざ子島」で、菩薩島ともいう菩薩影向の島である。人々の背丈は一尺二寸ばかりである。次の島では捕らわれてしまいあわやと思われたが、持参の笛を聞かせる。これが蝦夷が島であった。そしてようよう千島の都に着いたという。

そこには大王が住み、八十丈のくろがねの築地、くろがねの網をはり、くろがねの門が立ち、門のあたりには牛頭、馬頭阿防羅刹や「たたせいめうしゆやしやき」といった鬼どもがいる。もうこれまでも思い、またも笛を取り出して楽を奏すれば、その珍しさが大王の耳にも達する。

大王の姿は「五色をひやうし出で立ちて、十六丈のせいにて、手足は八つ、角は三十ありて、呼ばはる声は百里が間も響き渡る」ものである。そこで師弟の契約を結び、大王の宴につらなることになる。そして大王の娘と親しくなり、うまく「大日の法」を盗み見ることができる。これを見るとたちまち見終わって白紙になってしまう。大王はそれを知って娘を殺してしまうが、御曹子は無事に戻ってくる話である。

少し細かく内容に触れてみたのは、一つにはスウィフトの『ガリヴァー旅行記』にも匹敵する構想の作品で、大人国とか小人国、ヤフー(馬人)の国に類似するものが描かれていることであるが、着想の妙はありながらも、ガリヴァーには及ばないといわざるを得ない。二点目はこのような妖怪を描いてくれたことである。狐や狸、蛇などが妖怪化することはすでに取り上げ、『今昔物語』の中にくつも見ることができののだが、「御曹子島渡」の妖怪はまったくのフィクションとしての妖怪なのである。そのことを考えると、まさに作者の自由な、あえていえば奔放な空想を恣にして成立した妖

怪で、そうした妖怪を考え出せるような時代が到来したということである。

とはいえ、それは一つの異界を描いてくれており、まさに昔話の世界といってもよいことだろう。他界である死者の世界と隣り合わせの異界とはいえ、幻想の豊かさに驚異を感じさせざるを得ない。

イザナギ・イザナミの黄泉の国から戻ってくる話はあるにはあるが、本来は他界へ行けば、現実界には戻れないというのが普通である。だが異界の場合はそこから戻ることは可能であり、その意味で異界は昔話の世界なのである。そうした異界には妖怪がうごめいており、日本人が創造したとされる山姥の登場する昔話は、日本人の美的観念がそこに集約されているといつてよいだろう。その山姥という妖怪を昔話あるいは民俗語彙として、山男、山女などとも呼んでいるが、そうした日本人の妖怪観を豊かにしたという点で、「御曹子島渡」をも忘れるわけにはいかない。

そしてこのような妖怪観の豊かさを生み出したのも、あえていえば、室町時代から戦国時代、さらに江戸時代の初期の庶民の文化的現象なのではなからうか。

「狸の八畳敷」^②のサブタイプの昔話に「さとりのお化け」がある。

炭焼きの爺さまが山小屋で炭竈に火を入れてぼつねんと囲炉裏の前でクロモジの木で、カンジキを曲げていた。そこに山男がのっそりと入ってくる。爺さまは腹を減らした山男を見て焙った餅を差し出すと、喜んで食べてしまう。食べ終えても出て行こうとしない。そこで爺さまは「変な男だな」と思うと、すかさず「爺、変な男だなと思っっているな」という。気味悪く

なった爺は「もつと餅が食いたくてこんなことをいうのだな」と思う。すると「爺、餅をもつと食いたくて、こんなことを思っっているな」という。

爺さまが思っていることを、次々言い当てられて動転して、カンジキ作りの手はずしてしまい、熱い灰が山男の顔に掛かってしまった。山男は慌てて山小屋から逃げ出してしまった。次の朝に山小屋から血が点々と落ちてくるのをたどっていつてみると、大きな洞窟があり、中からうめき声が聞こえてきたので、入ってみると大きな狸が「人間とは怖ろしい妖怪だ」とつぶやいていたという。

さとりのお化けはそのまま山姥なのである。山姥の登場する昔話には最もよく知られている「食わず女房」「三枚の護符」「牛方と山姥」^②がある。「食わず女房」では飯を食わぬという触れ込みで、女房になった山姥が夫の留守に大鍋に飯を炊き、子どもも頭ほどもあるおにぎりを作り、髪をほどくと頭の真ん中に口があり、白い歯をがちが鳴らしておにぎりを食べると、元のように髪を結んで元の嫁さんに戻る。だがそれを夫に見られて正体を現し、夫を追うが、菖蒲と蓬野原にかくれて助かったので、五月節句の由来話になっている。「三枚の護符」も同様である。

「牛方と山姥」になると、いささかモチーフが複雑になり、峠の多い東北地方には、ことのほかよく語られている。人間と山姥の知恵比べの様相もあり、近くに峠をもつ山村などでは、特にリアリティをもつて語られて、評判がよい。

牛の背中に海岸端から干魚をつけて戻ってくる牛方を、峠で待つていて、「干魚一本呉れ」と追いかけて、干魚をみな食っ

た上に、「牛も呉れ」と、牛も食ってしまふ。その間に牛方は川を泳いで、対岸に逃げる。川を越えるということは「異界」へ入ったということである。

山の中腹に灯のともっている家があり、助けを求めると、実はそこは山姥の家だったのである。そこで天井に隠れていると、山姥が戻ってくる。「甘酒でも温めて呑もうか」と、鍋を囲炉裏に掛けると干魚や牛まで食べたので、腹一杯で居眠りを始める。そのすきに牛方は萱を一本抜いて、甘酒をみな呑んでしまふ。目を覚ました山姥は、「火の神さまが呑んだのでは、仕方がない」といつて、今度は餅を焙るが、また居眠りをする。牛方はまた萱で刺し釣り上げて、食べてしまふ。

山姥は仕方なく、木の唐戸(長持ち)に入つて寝てしまふのを見て、牛方は天井から下り、唐戸の蓋に大石を上げ、キリで穴を開けて、そこから大鍋に沸かした熱湯を注ぎ入れて山姥を煮殺してしまふ。

牛方の知恵に負けた山姥の話である。いずれも怖ろしい山姥の妖怪として描かれているといえる。

ところが、秋田県から発掘された山姥は、「山姥報恩」型で、山姥が子を産むので、村に、餅を搗いて持参せよという。そこで老婆が持参するが、お産が終わるまで手伝ってくれといわれ、それも無事に終わらせて、婆が帰るときに、山姥から錦をもらふ。その錦はいくら使つても、減らない錦で、村はうるおい、裕福になったという話である。

そうした山姥像を「食わず女房」に例をとって、馬場あき子氏は『鬼の研究』⁽²³⁾でこう記している。

桶屋の望み通りに、飯食わぬ女房として嫁いできた女は、山母で、夫の留守になると髪を解いて、頭部にある巨大な口から一斗の米と味噌汁を飲食していた。食いはてて髪を結べば、もとの働きもので人のよい女房なのである。この山母は飯をくわぬという苛酷な条件に堪して嫁いできたのでは無かるうか。頭部に口があったという荒唐無稽な発想は民話的ニユアンスのなかで、山母が常人との交わりの叶わぬ世界の人であることをにおわせたものであろう。

山姥は多食多産である妖怪たることを、吉田敦彦氏は『昔話の考古学』⁽²⁴⁾で、神話のオオゲツヒメから流れ出した像として捉えてみせる。スサノオが食物の無心にやつてくると、オオゲツヒメは体のあちこちから食物を出してくれるが、スサノオはその汚らしさを怒って、オオゲツヒメを殺してしまふ。死んだオオゲツヒメの頭から蚕、目からは稲、耳からは粟、鼻からは小豆、陰部からは麦、尻からは豆が生えたという。この衝撃的な説話は大地母神のそれと重なり、インドネシアの神話に見られるハイヌエレ説話と符合するものとみてよい。

そういえば、柳田の『遠野物語』には、かの有名な「サムトの婆」がある。

(八) 黄昏に女や子供の家の外に出て居る者はよく神隠しにあふことは他の国々と同じ。松崎村の寒戸と云ふ所の民家にて、若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるまま行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或る日親知音の人々其家に集まりてありし処へ、極めて老いさらばひて其女婦り来れり。如何にして帰つて来たかと問へば、人々に逢ひたかりし故婦りしなり。

さらば又行かんとて、再び跡を留めず行き失せたり。其日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムトの婆が帰つて来さうな日なりと云ふ。

「寒戸」は正しくは「登戸」というところだという柳田の誤りが指摘されたことは、現在ではよく知られたことであるが、柳田の詩心がそこに働いていたのではないかと、いいたくもなる。それはさておき、人恋しさに村の人々に逢いたいと帰ってきた心意が、山姥に貼り付いたもう一つのイメージで、いかにも日本人が作り上げた山姥像というものであり、妖怪がもっている属性というよりは、人間そのものの心意といつてよいものだろう。昔話の中の山姥は、いかにも人間的で、聞き手に素直に入り込み、納得されるのだから。そうした意味で、山姥は他の妖怪に比較しても、人間界と異界をつなぐ、極めて適切な妖怪といえるだろう。

山姥を考えるのに引くかかるのは、「姥皮」²⁵である。継子が蛇の処へ嫁入りし、そこから逃れて村に戻ろうとすると、山賊に襲われたら、この「姥皮」をかぶればよいといわれ、難を逃れてやがて長者の家の飯炊きとなり、その長男の嫁になるという話である。

「姥皮」は単なる婆の面というのではなく、多分に人間的な心をもった呪物であることには、この話は納得できないだろう。そうした意味で、似たような「鬼面の山姥」とは意味が違うのだろう。素直な長者の長男には婆の姿をしていても、人間的な心を持つた娘であることが、かえって「姥皮」をかぶっていたからこそ、理解できたのではないかとさえ思われる。

昔話の世界は聞き手の心を開き、新しい世界観への道を開いてくれる口承文芸だといえる。その最も率直な在り方の一つは、現実の

人間世界から異界に、聞き手を導いて、再び人間世界に戻ってくるときには、異界から絶大なエネルギーなり、富をもらい受けてくる。それによつて新しい自分を発見することになるのである。そのときに起こるドラマを興味あるものにして語ることが、「昔話の世界」であり、「語りの心」であるといつてよいだろう。

妖怪の話の中に、もう一つ加えなければならぬものに、付喪神がある。使い慣れた器物が化けたとされる付喪神は『今昔物語』にすでに姿を現している。巻第二七の「霊鬼」にいくつか顔を出している。「冷泉院の水の精、人の形と成りて捕らへらるる語」(第五)をはじめ、「東三条の銅の精、人の形と成りて掘り出ださるる語」(第六)などであるが、特に昔話との関係で見ると、「鬼、油瓶の形と現じて人を殺せる語」(第十九)を見ておきたい。

小野宮実資という当時の右大臣は才識あつて、心賢かつたので、人々は賢人の右大臣といつていた。参内して大路を車に乗って行く時、車の前に小さい油瓶が踊っている。「変なこともあるものだ、一体何者か、物の怪か」と思っているうちに、ある人の家の門の処まで来たが、戸が開けられている。ところが鍵穴からすりりと入つて行つてしまった。

大臣はそれを見とどけてから、「この家に何事があつたのか」と人をつかわして聞くと、この家には娘があり、今日の昼ごろ亡くなったという。大臣は「あの油瓶は物の怪で、鍵の穴から入つて、娘を殺したのだから」という話である。

「然れば、此かる物の気は、様々の物の形と現じて有るなりけり。此れを思ふに、怨を恨みけるにこそは有らぬ。此くなむ語り伝へたとや」と結んでいる。鬼が怨んで器物に化けたというのである。

やがて『御伽草子』の時代になると『付喪神記』が見られる。その冒頭に「陰陽雜記に云ふ。器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす、これを付喪神と号すといへり。是によりて世俗、毎年立春に先立ちて、人家の古道具を払ひ出して、路地に棄つる事侍り、これを煤払ひといふ。これ百年の一年たらぬ付喪神の災難にあはじとなり」と記している。

記紀神話に岩石とか木の株、草の葉などに霊が宿っている姿が描かれているが、時代が下がるに従って物質文明が進み、物から霊魂が剥離脱落して行き場がなくなり、人が心を込めて作った道具が十分に使用されずに、煤払いとして無造作に路傍に捨てられるものに入りこんだのが、付喪神となったのだろうと、澁澤龍彦は「付喪神」⁽²⁶⁾で論じている。江戸時代になって「百鬼夜行」の図などと共に凶像としてしばしば描かれることになるが、大切にしたものゝ霊魂が宿るといふのは庶民感覚からも十分理解でき、生活の中の規範でもあり倫理でもあつたらうから、昔話の要素としてしばしば語りの中に入り込んできたのであろう。

「牛方と山姥」で、煮え湯で殺したと思つていた山姥を次の朝に見てみると、古下駄であつたというし、「化物寺」の化物の正体も付喪神であつたから、語り手によつては、結びに決まって「だから物を粗末にするもんでないそうな」と加える例も多い。短い物だが、海老名ちやうさんの「化けものむかし」を記しておく。(『牛方と山姥』昭45)

昔あつたど。

神さまに、毎晩げ、提灯の化け物出つたつたど。何化け物だかと思つて行つたば、踊りおどつたど。「おれあ、何の化け物

だ。あんだ何の化け物だ」というど、「俺あ提灯の化け物だ」というもんで、負けんな負けんな、と踊つたど。そうすつど「ま明日の晩げ来つからな」と帰つていつた。

「提灯の化け物」とこらに提灯あるかも知んないと見たら、古ぼけた提灯が虫食つて始末しないもんだから、そいつを始末してもらいたくて、出てきたんだど。んだから始末もしないで、押つつけて置くと、みな化け物になつて出はつてくる。とうびんと。

人形芝居で村を歩き回つた人形師の家では、毎年三月節句の雛飾りに、必ず一緒に飾る物だとし、そうしないと妖怪となつてしまふという田舎人形師に出会つたこともあつた。そうした付喪神を昔話で語ることは、聞き手にもスムーズに理解されたことであろう。昔話に登場する器物や動物は、日常生活の中で目にするものであり、その延長で幼児にも理解、想像できるものから入ることで、そこに語り手の経験から来る倫理、道徳観、生き方を加えることが大いにあるのは、特に囲炉裏端の語りの一つの特徴ともいえるだろう。

小松和彦氏⁽²⁷⁾によれば、ヨーロッパには人工物に霊魂が宿ることとはないようであるという。だから付喪神もないのだろうという。それに対して日本ではモノを作つたときに「魂・霊」を入れるときに、初めて完成するといふ。そこに日本人の靈魂観の特色が見られ、日本独特のものであろうと指摘しているが、それはそのまま日本の昔話にもいえることであろう。

注

- (1) 武田正「昔話の成立」(『山形短期大学紀要』42、平22・3)、「語りの展開」(『東北文教大学東北文教大学短期大学部紀要』1、平23・3)
- (2) 佐竹昭広『民話の思想』(平凡社、昭48)
- (3) 山形県東根市の滝口国也氏の紹介で、語り手・横尾翁から伺った。
- (4) 河合隼雄『昔話と日本人の心』(岩波書店、昭57)
- (5) 「桃の子太郎」(『日本昔話大成』一四三。以下、「大成」と略す)
- (6) 「瓜子織姫」(大成一四四A)
- (7) 「一寸法師」(大成一三六B)
- (8) 関敬吾『日本昔話の社会性に関する研究』(関敬吾著作集第一巻、同朋社)
- (9) アン・ヘリング『江戸児童図書へのいざない』(くもん出版、昭63)
- (10) 前掲(1)「語りの展開」
- (11) 「ジユゲム……」は昔話から元禄ごろに落語家に拾われて評判になり、昔話の中では「形式譚」(大成六三六)として、各地に種々のものが見られる。
- (12) 「形式譚」では「三つの話」(大成六三六C)であるが、塚原氏は「おっかなくて、おかしくて、むごさい話」という題名で語って下さった。
- (13) 「はて無し話」(『昔話と文学』「柳田国男全集第九卷所収」)
- (14) 畠山忠男・野村純一「話の三番叟―秋田の昔話」(桜楓社、昭52)、石川純一「河童火やろう―福島の前話」(桜楓社、昭47)
- (15) 稲田浩二「昔話の時代」(筑摩書房、昭60)
- (16) 前掲(8)
- (17) 桜井徳太郎「動物昔話の類型―人獣交渉史の視点―」(『文学』四〇巻一〇号、昭47・10)
- (18) 「蛇髻入・苧環型」(大成一〇一A)、「蛇髻入・水乞型」(大成一〇一B)
- (19) 『遠野物語』(柳田国男全集第二卷)
- (20) 米沢藩主となった上杉鷹山は、草木にも「こころ」(命)があるとして「草木塔」を建てさせたといわれる。
- (21) 「狸の八畳敷」(大成二六六)
- (22) 「食わず女房」(大成二四四)、「三枚の護符」(大成二四〇)、「牛方と山姥」(大成二四三)
- (23) 馬場あき子『鬼の研究』(三一書房、昭46)
- (24) 吉田敦彦『昔話の考古学』(中公新書、平4)
- (25) 「姥皮」(大成二〇九)
- (26) 澁澤龍彦「付喪神」(『思考の紋章学』「河出文庫、昭60」)
- (27) 小松和彦『神々の精神史』(伝統と現代社、昭53)